国　語

(一)　次の文章を読んで、後の問い（問一～十二）に答えよ。

伝統的な歴史学では、家族は「私領域」として研究の対象にならなかった。しかし、女性史・ジェンダー史にとって家族は、政治や経済の行方にも影響を及ぼす重要な領域であり、それゆえ中心的なテーマの一つである。ここでは、ヨーロッパを中心とする家族そのものの歴史的変化と家族の多様性について取りあげる。

情愛によって結ばれる血縁家族は、家族の自然な姿、つまり文化や社会の違いを超えて人類社会に普遍的A に存在する超歴史的なものというイメージが定着していたし、今でもそう考える人は多い。しかし、半世紀ほど前から人びとの感じ方や考え方、行動様式、人生観、つまり心性（マンタリテ）という観点から家族成員間の結びつきのあり方に注目する歴史研究が次々に登場するようになり、家族に関するわれわれの「常識」B は揺らいでいった。家族は、歴史化されたのである。その牽引者となったのが、フランスのアナール派社会史[注1]だった。

家族の集団としての閉鎖性や情愛が誕生するのは、かつて人びとが属していた都市や農村の共同体の影響が衰退し、プライバシー尊重の気運が高まって情愛的個人主義という文化が強くなってからである（ローレンス・ストーン）。その時期はもっとも早いイギリスで一七世紀後半以降のことで、西ヨーロッパ諸国を含めて一八〇〇年前後にかけて変化が起こり、[1]家族は他の集団とは区別される閉鎖性と親密性を獲得した。結婚相手の選択や結婚生活での「愛」の価値が高まり、後述する伝統社会の家族が有していた経済的・実用的要素は、少なくとも言説レベルでは後景に退いていく。子どもが慈しまれる存在になるのも同時期で、文献史料とともに絵画や墓碑銘など数多くの図像史料を用いて子ども観の変遷を研究したフィリップ・アリエスによれば、近代以前には子どもは七歳くらいから「小さな大人」として認識され、成人の共同体のなかに入って、ともに遊び、働き、学んでいた。子どもに愛情が注がれ、家族空間の中心に子どもが存在するようになり、大人と区別される独自な発達段階としての「子ども期」が誕生したのは、子ども服や子ども用の玩具が出現しはじめた近世後期以降のことだったのである。

本能だと考えられていた母性愛も歴史の産物だった。エドワード・ショーターは、工業化による市場経済の登場と共同体による束縛の衰退によって個人主義や愛情という心性が生まれ、ロマンティック・ラブや、生活水準の向上による母性愛、さらに家庭愛が出現した、と指摘した。実際、乳幼児死亡率が高かった一八世紀半ば頃までは、子どもが死んでも親はそれほど嘆き悲しまなかった。また貴族や都市住民の母親は乳児の世話を他人に委ねることが多く、裕福な人びとは乳母を雇い、生計維持のための労働で忙しい職人層は農村に里子に出した。農村では母親が授乳したが、乳児は大人の労働の邪魔にならないように、また身体が曲がらないようにとの配慮から、帯状の布で両手両足を伸ばしたままぐるぐる巻きにするスウォッドリングをされていた。里子の死亡率は高かったが、それでも都市住民は生活の糧を得る必要性から乳児を農村に送ったのである。捨て子も多く、大都市には養育院が設けられていた。

一八世紀半ばの啓蒙時代になると、あらたな育児観が登場した。啓蒙主義者たちは、他人にまかせっぱなしの子どもの養育に両親自ら携わるべきと説くようになる。スウォッドリングは、子どもを束縛するゲン凶a だと批判された。彼らは、育児の価値を引き上げ、子どもに対する両親の道徳的な［　Ⅰ　］をカン起b した。母乳育児の推ショウc は、その一例である。ルソーは母親と子どもとの身体的接触によって愛情の絆による結びつきが強まると考え、子どものために献身し、どんな犠牲もいとわない母親像を描きだした。［　Ⅱ　］

一九七〇年代を中心に行われた家族に関する歴史研究によって、われわれが思い描くような夫婦や親子が強い情愛で結ばれた私的で閉鎖的で親密な、そして性別役割分担によって女性がケアを担当する家族は、まだ二五〇年あまりの歴史しかもたないことが明らかになった。これを「近代家族」という。

近代家族論の登場以前にも家族史研究はわずかながら存在したが、家族を単位とした研究がなされても、家族内の関係性には、あまり注目が払われなかった。母性の歴史性や子どもの誕生を指摘した近代家族論は、家族内での成員どうしの関係やそれぞれの居場所や役割を重視し、家族史研究への女性・ジェンダー視点の導入を容易にした。折しも同じ時期に欧米でフェミニズム的な新しい女性史が誕生したことが相乗効果となり、家族史研究への女性の視点の導入が活発になり、家族史のフェミニズム的な読み方も示された。

ドイツ女性史研究の黎明期の一九七〇年代末に、バーバラ・ドゥーデンとギゼラ・ボックは、一八世紀末までの家経済の時代には公私が未分離なため生産労働と消費は完全には区別できず、したがって、われわれがイメージするような家事労働は存在しようがなかったことを明らかにした。私領域である家庭で妻が夫や子どものケアをする、という意味での家事労働やその概念は、家族が生産の場ではなくなることによって、はじめて誕生したのである。そしてドゥーデンらは、家事労働が長年、労働の範疇に含められず、就業労働だけが労働とみなされてきたのは、前者が「愛の行為」ゆえに無償であり、対価も「愛で受けとる」とされたからだ、と指摘した。家事・育児に専念し、かいがいしく夫や子どものケアをするという、われわれがイメージする主婦像は、近代になって生産の場と消費の場が分離したからこそ登場したのである。

母性愛に関しては、これを肯定的に捉えるショーターら近代主義者とは異なり、フランスのフェミニストのエリザベート・バダンテールは、「女性は家庭」という性別役割分担の要因となった母性愛本能説に終止符を打つために、母親の子どもへの接し方や母性観の歴史を読み解いていった。さらに夫による支配と妻の従属を基本とする伝統社会の桎梏と対比して近代の解放を称賛するショーターの説は、農村社会での男女の役割とそれぞれの持場、男女関係、とりわけ夫婦関係に注目したマルチーヌ・セガレーヌらの研究によって、実証的に批判された。男性は主に鋤や犂を使った農耕労働に従事し、女性は竈を守り、水くみ、料理、家の維持・管理、自家消費用の糸紡ぎと機織り、菜園、養禽、余ジョウ生産物の市場での販売を担当するという役割分担が存在したが、男女が共同で従事する労働もあり、男女の労働と役割は相互補完的で連帯的で密接につながりあっている。したがって、権威をもっている男性に女性が従属しているわけではなく、積極的に農業労働に携わっていた女性の地位は都市のミドルクラスの主婦より、はるかに高かった、というのである。

ジェンダー研究は、さまざまな時代・地域の家族を取りあげ、家族の範囲、規模、形態、成員間の関係などが非常に多様であること、また同じ時代・地域であっても、階層によって大きな違いがあることを明らかにしてきた。家族形成に影響を与える要因は実にさまざまだが、代表的なものとしては、生産様式、社会制度、親族構造、宗教などが挙げられる。そして、それぞれの家族によって、その基礎となるジェンダー把握も多様であり、特定の家族形成に好都合なジェンダー構築が行われる側面もあった。

近代家族は、近代に固有の、それも西洋に起源をもつ家族のあり方である。それでも、西洋に限らず世界の多くの地域で、近代家族こそ「家族の本来の姿」という幻想を与えうるだけの規範としての力をもっていた。それは同時に、西洋文明の「優位性」の指標の一つであった。それゆえ西洋文明を取り入れて世界各地で近代化が推進される過程で、近代家族は重要な位置を占め、女子教育の普及もこれに関連していた。日本での良妻賢母思想の形成、韓国への日本経由あるいは西洋女性宣教師による賢母良妻思想の伝搬、また一九世紀後半の列強による海外進出の過程では、近代家族は「文明化」の手段の一つとして喧伝された。イスラーム圏でも、近代的な社会改革の過程で近代家族はあるべき家族のモデルとしての役割を担い、オスマン帝国

では一九一七年の新しい家族法によって一夫多妻制が実質的に禁止された。清末から伝統的家族制度への批判が繰り返されるようになった中国では、一九一〇年代に起こった儒教批判や西洋化を主張する五四新文化運動[注2]の時期に、西洋の近代家族モデルに倣った、愛にもとづく結婚および夫婦と子どもを中心とする「小家庭」が提唱された。小家庭は都市の中間層では見られるようになったが、そのための社会的・経済的条件は整っておらず、伝統による規定要因も根強かった農村には浸透しなかった。

近代家族論が登場した一九七〇年代に、近代以前の身分制社会の家族に関する研究も静かに進行していった。近代家族論を形成した心性研究とは視カクの違う家族の捉え方、つまり家族の果たしていた機能や役割に注目する研究で、近代家族とは異なる伝統社会の家族の姿を浮かびあがらせた。

家族という用語ははるか昔から存在していたと考えがちだが、実はその歴史は比較的浅い。しかも、この言葉に込められた意味も、時代によって異なっていた。たとえばドイツ語の家族 Familie という言葉はラテン語のファミリア Familia に由来し、フランス語を経由して一八世紀への転換期にドイツ語に浸透した。ファミリアは家共同体員を意味し、奉公人や家内奴隷も含めて一つの家に暮らす人びと全体を指していた。ドイツ語にはもともと家 Haus という言葉が存在し、建物と同時に家父長を中心とする労働および生活共同体を意味していた。家族 Familie という言葉は、ラテン語のファミリアと同様に、そこに住む人びとという意味で用いられた。したがって家族には、家共同体に暮らす夫婦と子どもだけではなく、家に同居する奉公人も含まれていた。ちなみに裕福な家には生産手段に乏しい他の家族の一定年齢に達した子どもたちが奉公人として生活を共にし、家族の成員として家の経済活動に参加していた。

住民の大多数が農民か、手工業者や商人だった工業化以前の社会では、経営体である家族＝家を中心に経済活動が営まれていた。［ア］家族は、消費共同体であると同時に生産の単位であった。この家族＝家は、一、構成員は家父・家母・子ども・奉公人、二、家計と経営の一体化、三、家父長による他の成員の支配、四、政治世界の基礎単位、という特徴をもっていた。一家の主である家父は、生産労働と家の経営に携わった。家母である主婦は、生産労働や夫の経営の補助、菜園や家畜の世話をするとともに、糸紡ぎや機織り、蠟燭作り、料理、洗濯、食糧の貯蔵など消費領域を管轄した。限られた季節にしか収穫できない食糧を、家族が年間を通じて食べられるように貯蔵・分配するのは、生産に匹敵する重要な労働だった。その意味で、生産と消費は明確には分離していなかったのである。［イ］公私は未分離の状態であった。奉公人と同様に子どもにも家での労働義務があり、家長の権限に服していたので、子どもと奉公人が同列に扱われることもあった。［ウ］、相続権があるのは子どもだけだった。

身分制社会の家族＝家は、経済活動と同時に、子どもの出産・養育・教育という機能も果たしていた。またドイツの啓蒙専制国家では、家族は政治や行政の目的と結びついた国家の末端の構成要素であり、一つの公的秩序を形成してもいた。国家は家族生活の内部に介入し、家族内での人間関係や服装など、日常関係の細部にいたるまで厳しく規制した。また家が所属していた農村や都市の共同体も、夫婦関係や家族内のトラブル、結婚相手の選択、性と生殖など、日常生活のさまざまな側面で干渉した。ここが、国家や社会という公領域の対極にある親密な私領域とみなされた近代家族と決定的に異なる点である。個々人は家のなかに統合され、家長が外界に対して家を代表した。ただし、家長である夫が死亡して子どもが低年齢だった場合、寡婦が家長となった。夫と妻の間には役割分担が存在し、家父長制は貫徹していたが、男性か女性かという生物学的な性ですべてが決定されるのではなく、寡婦には権限が認められ、妻は経営補助、生産労働、消費の管轄など、一家の生活を成り立たせるために不可欠な役割を担っていた。

一八世紀末になると、家長が官吏など家以外の場で職業をもつようになり、経営体としての性格を失う家

族が増えてきた。生産活動と切り離された家族は［　X　］な性格をもちはじめ、夫婦と子どもという家族成員間で［　Y　］な結びつきが生まれ、居住空間をともにする同一世帯内の他のメンバーとの間に一線を画すようになった。すなわち、この時期には家族概念の定義でも変化が見られ、従来は家族成員のなかに含まれていた奉公人が、夫婦と子どもという血縁家族とは［　Z　］に区別されるようになった。家と家族が分離し、奉公人は家の成員で同居人ではあっても、家族成員とは別の範疇に入れられるようになったのである。こうして、夫婦と子どもからなる近代家族が成立した。

（姫岡とし子『ジェンダー史10講』による）

注1　アナール派（アナール学派とも）　フランスの歴史学派。名前は機関誌『年報』（アナール）に由来する。戦争や政治的な事件、著名人の活躍に主眼を置いた従来の歴史学を批判し、民衆の生活文化なども歴史を形成する重要な要素であることを主張した。

注2　五四新文化運動　一九一〇年代の中国で起こった文化運動。魯迅や周作人らの文化人が中心となり、旧来の道徳や文化を批判し、人道主義にもとづく新しい価値観を求めた。

問一 傍線部a～eの漢字と同じ漢字を含むものはどれか。次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 1 ～ 5 。

a ゲン凶 1

1 都会生活にゲン滅する
2 ゲン刑の恩典に浴する
3 ゲン帥が発表した声明
4 ゲン行が一致しない人
5 ゲン格な教育を受ける

b カン起 2

1 証人として召カンされる
2 宇宙から無事帰カンする
3 諸般の事情をカン案する
4 尺をヤードにカン算する
5 社会のカン例を無視する

c 推ショウ 3

1 敵が制海権をショウ握する
2 不ショウの弟子を持つ老師
3 成立年代未ショウの和歌集
4 給付ショウ学金を得た学生
5 情念を作品にショウ華する

d 余ジョウ 4

1 ジョウ長な文体で書かれた評論
2 言葉に過ジョウに反応する若者
3 流行に便ジョウして新作を出す
4 国有財産を無償でジョウ渡する
5 玄関をしっかりと施ジョウする

e 視カク 5

1 遠カク操作アプリを使う
2 法律の立案に参カクする
3 生産ラインをカク充する
4 世の人々をカク醒させる
5 太陽の仰カクを目測する

問二　傍線部A「普遍的」と傍線部B「常識」と類似した意味を持つ言葉はどれか。最も適当な組み合わせを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

1　A　プロフェッショナル　B　ナンセンス
2　A　ユニバーサル　B　コモンセンス
3　A　インターナショナル　B　エッセンス
4　A　フィジカル　B　ハイセンス
5　A　スピリチュアル　B　イノセンス

問三　傍線部1「家族は他の集団とは区別される閉鎖性と親密性を獲得した」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 7 。

1　混合状態にあった公私が分離されるにともない、家族は経営体としての性格を失い、血縁と愛情の絆により結ばれるようになった、ということ。
2　生産労働に加担しない奉公人を家族成員から外し、家族愛を血縁関係にあるメンバー、すなわち親と子どもに限定した、ということ。
3　乳幼児の保育・育児について他人の力を借りるのを止め、児童の教育指導は家庭内において、愛情に力点を置きながら父母が自ら行うようになった、ということ。
4　他の生産および消費の共同体と異なり、家族は国家による介入・規制を許さない、構成員の個人主義と情緒主義によって支配される空間となった、ということ。
5　母子の身体的接触の重要性が自覚されることで家庭内の親子関係が強化されたが、他の家族との関係が希薄化した、ということ。

問四　空欄Ⅰに入るものはどれか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 8 。

1　権利と自由
2　直観と倫理
3　指導と処罰
4　自制と解放
5　義務と責任

問五　空欄Ⅱに入るものはどれか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 9 。

1　イデオロギーとしての母性愛の誕生である。
2　母親に自制心を求める家族像の原型である。
3　親と子供を結ぶスキンシップの出現である。
4　デマゴギーとしての家父長制の終焉である。
5　児童虐待の防止を目指す運動の原点である。

問六 傍線部**2**「相乗効果」とはどのような現象か。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 10 。

1 複数の要因が相殺されつつ作用し、個々がもたらす効果の積になる効果を生み出す、という現象。
2 複数の要因が繰り返し作用し、個々がもたらす効果の差になる効果を生み出す、という現象。
3 複数の要因が交互に作用し、個々がもたらす効果の差以上の効果を生み出す、という現象。
4 複数の要因が同時に作用し、個々がもたらす効果の和以上の効果を生み出す、という現象。
5 複数の要因が補完し合いながら作用し、個々がもたらす効果の和になる効果を生み出す、という現象。

問七 傍線部**3**「西洋文明の『優位性』の指標の一つであった」とあるが、「優位性」にカギ括弧を付けているのはなぜか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

1 オスマン帝国などアジア諸国の社会において、依然として根差していた男女不平等の現状を改善する過程で、西洋の近代家族像が果たした役割の重要性を強調するため。
2 西洋という限定された空間に誕生したにもかかわらず、異文化世界の近代的な価値観の形成に多大な影響を及ぼした西洋の近代家族像の普遍性を読者に自覚させるため。
3 近代家族像および女性教育をめぐる思想の普及に際して一翼を担い、本文で同じくカギ括弧で表記されている「文明化」という概念との表裏一体の関係を顕在化させるため。
4 西洋大国による海外への進出過程において、西洋の近代家族像は先進的な家族の理想像として喧伝されたが、そのような評価には疑義があるという筆者の見解を明示するため。
5 西洋の近代家族像は、家族のあるべき姿として認識されていたが、多くの地域では導入に必要な条件が整っておらず、実用性が低かったことから、「優位性」という評価に疑問を呈するため。

問八 空欄**ア**～**ウ**に入るものはどれか。最も適当な組み合わせを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 12 。

1 **ア** しかし　**イ** なお　**ウ** さらに
2 **ア** すなわち　**イ** だから　**ウ** また
3 **ア** したがって　**イ** もちろん　**ウ** ただし
4 **ア** なぜか　**イ** 結局　**ウ** それなのに
5 **ア** だから　**イ** 当然　**ウ** だからといって

問九 空欄X～Zに入るものはどれか。最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号はX＝[13]、Y＝[14]、Z＝[15]。

X

1 知的
2 私的
3 外的
4 公的
5 法的

Y

1 利己的
2 個人的
3 客観的
4 没我的
5 情緒的

Z

1 変則的
2 恣意的
3 意識的
4 断片的
5 例外的

問十 本文では複数の研究の内容が紹介されているが、紹介されている内容と**合致しないもの**はどれか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は[16]。

1 ローレンス・ストーンは、近代以前から存在していた様々な共同体の縛りが緩和され、情愛的個人主義の思想が広まるにともなって、従来の家族のあり方が変化したことを示した。

2 フィリップ・アリエスは、文献史料や図像史料を中心に子どもをめぐる考え方を検討し、一定年齢に達した子どもが成人とともに活動していた時代もあったことを説明した。

3 エドワード・ショーターは、理性を越えるものと思われてきた母性愛は、近代以降の工業化がもたらした社会変化にともなって生み出されたことを指摘した。

4 バーバラ・ドゥーデンとギゼラ・ボックは、家族内の労働と消費の関係に注目し、公私が未分離であったため、家事労働そのものが存在していなかったことを実証した。

5 エリザベート・バダンテールは、母親と子どもの関係などに注目し、母性をめぐる考え方の歴史を分析することによって、母性愛本能説を否定しようとした。

問十一　本文で示される筆者の立場として正しいのはどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

1　近代家族の歴史的な変遷やその多様性など、家族をめぐる諸問題が伝統的な歴史研究において長い間等閑に付されてきたことについて不満を表している。

2　子どもを熱愛し、必要であれば自己犠牲もいとわないというルソーが提唱した新しい母親像を心性（マンタリテ）という観点から高く評価している。

3　近代以前の家族において女性は生産に匹敵する重要な労働を担っていたにもかかわらず、その労働が「愛の行為」として過小評価されていたことを矛盾として捉えている。

4　一八世紀の半ば頃まで、幼児死亡率が高かったにもかかわらず、都市住民が生活上の必要性を理由に幼児を農村に送りつづけたという慣行を実証的に批判している。

5　家族のメンバーの関係や役割分担などを検討した近代家族論は、家族史研究に女性という視点が導入されることに寄与したという認識を示している。

問十二　本文の内容と**合致するもの**はどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 18 。

1　生産労働と家事労働が分離された結果、家族構造の基盤をなしてきた男女の相互補完的な関係が崩壊し、男性は生産、女性は家事と子育てを担うことになった。

2　西洋の近代家族は数多く存在する家族像の一例に過ぎず、家族構造を支える性差もまた決して自然発生的なものではなく、各種要素に影響されながら作り上げられたものである。

3　ドイツ語のFamilie（家族）という用語の歴史からも明らかなように、近代以降の西洋の家族内では義理にもとづく縦の関係より人情にもとづく横の関係が重要視されるようになった。

4　人類社会に超歴史的なものとして存在してきた家族が一九七〇年代以降に女性史やジェンダー史の登場により初めて歴史化され、家族をめぐる「常識」がリセットされた。

5　近代家族の成立にともなって男性は生活の糧を得るため家以外の場で職を求めるようになった結果、従来の家父長制が緩和され、女性（家母）が経営補助や消費の管轄を引き受けるようになった。

【選択問題】現代文

※国文学科に出願している場合（国文学科を併願している場合も含む）は、(二)ではなく、19ページからの(三)を解答すること

※この問題を解答する受験生は、マークシートの「(二)現代文」にマークの上、解答すること

(二) 次の文章を読んで、後の問い（問一～十一）に答えよ。

奥という表現は、万葉、伊勢物語、徒然草、そして江戸時代の歌舞伎に至るまで、日本人にとって特有な場所性の指示という形で我々の日常空間体験の中に定着している。ここで興味あることは「奥」なる言葉が常に空間においては奥行という概念を含みつつ使われていることである。一体奥行とは何を意味しているのであろうか。「奥行」なる概念は与えられた空間の中での相対的距離であり距離感である。他の民族にくらべて昔からかなり高密度な社会を形成していた日本人にとって空間はより有限で、こまやかなものとして印象づけられてきたに違いない。その結果、限られた空間の中に遠近の差を相対的に設定するというデリケートな感覚が早くから芽生えていたのではなかったかと思われる。それでなければ「奥行」なる概念は説明し難いものであろう。たとえ百メートルの距離でも、あるいは十メートルの距離の中にも、相対的に「奥」を認識し、奥に至る道程[1]を設定することによって、初めて重層化された空間のひだと、何故ひだをつくろうとするのかという日本人の空間感、大げさにいうならば、宇宙感を納得することができる。

と同時に「奥」が「抽象的に奥深いこと。事が深遠で測りがたい」意味をもつことも理解されよう。ここで「奥」は空間のみならず、心の奥というかたちで心理的なものを表わすことにも使用されていることに注目しなければならない。

さらに日本語の場合、奥を形容的に用いた言葉がいかに多いことか。空間でいうならば、奥所、奥口、奥社、奥山、奥座敷に始まって、何か見えないが陰然と存在するものとしての奥伝、奥儀、社会的座としての奥の院、奥方、大奥といった具合に、そうした存在を肯定する社会性をあらわしている。

こうした奥の存在を日本の空間の中に発見し、論評した最初のものの一つに宇佐見英治の『迷路の奥』がある。彼は観光地や温泉場の、外観はさほどでないが内部に入ると広い旅館の屈折する廊下がつくり出す迷路的な空間の演出の中から「奥性」を見出していく。著者は、こうした複雑な空間[2]の分節はあながち次々別屋を建て増したり、地勢や景観がそうした配置を要求するばかりでなく、我々に迷路に対する好みがあるのを知っているのではないかと設問する。今その一部を引用してみよう。

「あの行き昏（く）れた感じ、旅館の女中に案内されて行くとき、じっさい以上に遠くへ来た感じ、それは何によるものだろうか。前後の接続関係をたよりに目印になるものに眼を留めながらゆくとき、次第に目ざめてくる動物的感覚、またはケイ[a]起という時間の秩序への完全なフク[b]属が――大げさな言い方だが――われわれのたましいを先史時代人の état d'âme[注1] に近づけるからだろうか。それとも度々の屈折によって眼前の光景が生滅し、昇り下りで歩行のリズムがわずかに狂うことによって、心が次第に現実的なものから非現実的なものへと誘い出されるからだろうか。この遥けさは想像的な世界にさまよい出た心の遠さではあるまいか……」

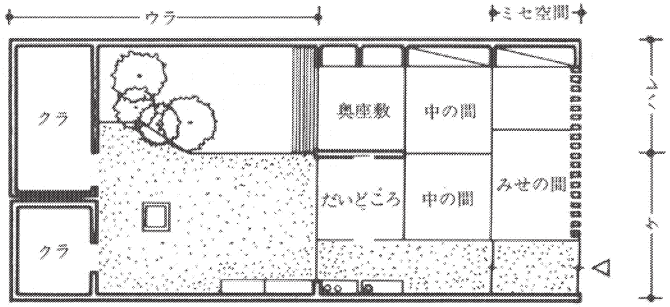
自然界、たとえば山とか森林の奥、そしてその人工的な小世界への移行と考えられるいわゆる日本式庭園の中の奥、あるいは都会の露地の一隅に与えられた「奥」から始まって、我々日本の歴史的な住居の型の中

にあらわれる奥を調べるとき、それはさらにはっきりとした位置と座を与えられていることを理解することができる。

日本において最初に完成された住居の型である寝殿造りは、前後二列、左右に展開する部屋部屋に廻廊をめぐらした形式であって、ここではまだ奥は日本独特なものとして空間の座を獲得しているとはいえない。

しかし書院造りが発生し、武家屋敷が型として定着するとともに、[3]奥は極めてユニークな存在として顕在化する。書院造り、武家造りにおいて注目すべきことは出入口、即ち玄関が平面の「すみ」に設けられ、武家屋敷ではそこから広間、対面所、主人の寝所が雁行[注2]状に配置されている。玄関を含んで対面所は表、寝所は中奥と呼ばれ、表向（ハレ）の領域に属する。これに対してその奥に設けられた、夫人の居間である御上、局、台所は、奥向（ケ）の領域として区別されている。奥はこのように、中心でもなければ、裏でもない独特の方向性（斜め奥）と座を附与されている。そして町家のつくりにおいては、全体の構成は武家造りと全く異なり奥、あるいは表口などの主要な空間が全体系のなかでつくり出す意味論的構造は武家造りのそれと逆転していることは興味深い。つまり図で示すように町屋においてはケとハレの領域が縦方向に分割され、ケに属する出入口と、ハレの奥にある奥座敷との間にはやはり、斜めの方向性があることがわかる。そしてミセ空間であるいわゆるオモテとクラを含むウラという領域を限られた空間の中で重層させることによって、次数の高い様々な場のあり方と、意味の多様性を演出している。

図　町家の奥



Ⅰ　日本の農家の平面のもっとも基本的な型である大黒柱を中心としたいわゆる田の字プランにも、極めて明瞭に奥性が認められるのである。濃密な空間体系は規模でなく、Ⅱ　このような空間構造の軸の数の多さによって規定されるのである。

戦前、我々の都会の中で多く見られた文化住宅には、位置関係は若カン[c]違っているが、接客のための応接間、家族のための居間、そしてしばしば、特別な客をもてなしたり、その家の家長が使う奥座敷が設けられた。限られたひろさの中でこのように三種類ものパブリックな場所が設けられたことも面白いが、一方では極めてプライヴェートなものであり、しかし且つ儀式的な意味でパブリック性をも与えられていた「奥座敷」の存在は、武家屋敷の奥と町家の奥が複合したものとして、ここでも日本的な領域概念の複雑性、そして曖昧性を示しているものとして興味深い。そしてこれ等三種の公的空間は[4]必ずしもヒエラルキーをはっきりと前面に打出していない。

数年前私は築地の明石町の小さな町家に住む老婦人を訪問する機会があった。間口四尺に満たない入口へ格子をひいて入ると上り[注3]かまちは正面でなく側面に設けられている。そして障子をへだてて続く小さな四帖（じょう）半には炬燵がしきられていて、ちょうど玄関と並列して今入ってきた直ぐ外の道路からあかりをとっている。ここが接客部分を兼ねているが、Ⅲ　その奥に四帖半程のスペースが台所を兼ねて、寝所の小部屋になっている。私が驚いたのは、この僅か八坪に満たない小空間の中に展開する方向性の複雑さであり、座の重畳性であった。そして神棚、仏ダン[d]、床の間の存在によって、この小空間はさらに方向性を増し、奥性の存在を強化する。

宇佐見英治が外国式ホテルにある真中から入ってはじへはじへと向う感覚と対照的に奥へ奥へと向うごとき印象を与えると述べたあの旅館の空間の方向性は、実は現代の僅かな庶民の小住居にも生き続けているのである。そしてそれは単に空間概念としてだけでなく、集団の深層心理を通して、より抽象的な社会組織の

中にまで浸透し、奥という概念を普遍的なものとしている。

それでは何故このような「奥の思想」ともいうべきものが古くから日本の文化の中に育まれてきたのであろうか。

日本列島の太平洋沿岸の諸地域、特に古くから集落が発生した九州から関東にわたる地域は比較的温暖な気候に恵まれ、しかも照葉樹林地帯の特徴として水が豊富で、緑は濃く、変化にとんでいた。このような環境の中で日本人特有の自然観が育まれていったのではないかということは一つの通説になっている。しかしそれはあくまで弥生時代以降であってそれ以前の我々の祖先は狩猟、採集を中心とした生活で時に山ぞいに住み自然を鑑賞するといった余裕はほとんどなかった。

しかし弥生時代に入り稲作が盛んになり、住居も平地式住居に変っていくとともに注目すべき現象がおきてきた。それは里は人の住むところ、山は特別の場という里と山の環境分離が始まることであった。つまり山は通常人の行動圏に入らない山中他界の思想である。山は次第に［　ア　］、神聖化され、やがて禁足地となり山そのものを信仰礼拝の対象とするかにみえる自然的な色サイ[e]をもった宗教形態ができあがった。アニミズムとシャーマニズムの合体としての神道の誕生であると同時に民俗信仰の基本形でもあるのだ。

神代雄一郎が日本のコミュニティの研究の中で述べているように、山を背にして田園と家屋群が里を構成するという日本における村落コミュニティの原型は、奥の存在を図式的に示唆するものとして私は極めて重要なものであると思う。何故ならばこのような集落は往々にして山の下を走る街道筋に沿って横に長く配列されていて、周辺にひろがる耕地を管理している。それに対して直角に山裾の神社、さらに山奥の奥宮をむすぶいわゆる宗教軸が確立されているからである。ここで初めて[5]奥は宗教性を方向というかたちで空間的に与えられたといってよい。

それはまさしく道からちょっと奥まって、樹木を背にした神社という形式で、今日東京をはじめいたるところで見られるパターンの原型でもある。しかも普段人の行かない山奥に奥宮を設けることによって、見えない位置に重要なものを存在させるという形式が（あるいは存在するという思想が）確立し、そのためには山道という屈折した到達のしかたしか与えられていない。たとえば西欧社会の信仰の中心の象徴であった教会が見える、あるいは見えさせる形式であることとくらべると極めて対照的なのである。もしもこの推論が正しければ「奥」なる概念は極めて古い時代から我々の地域社会に存在していたといわなければならない。しかし同時に奥は一方においてこのように他界であり、信仰の対象であったにしても決して、それは人々の日常の生活にとって親しみがたいものではなかった。万葉集挽歌で山中他界をうたった柿本人麻呂の

秋山の黄葉（もみぢ）を茂み迷ひぬる
　妹を求めむ山道（やまぢ）知らずも

から

奥山にもみぢふみわけ鳴く鹿の
　声きくときぞ秋はかなしき
（猿丸大夫、古今集）

に至るまで、七世紀ともなると奥山を鑑賞の対象としての自然としてみていく時代がやってくる。日本の山は一見、おだやかな表情をもっているものが少なくない。特に遠望においてそうである。従って山水を庭園の中にとりいれようとする構想は、このような自然景観をもったところでなければ自然に出てこないのではなかろうか。

インドやスペイン高原地帯の全く草木一つない荒山や、日本と同じモンスーン地帯でも熱帯に属するボルネオ[注4]の北部にある富士山に匹敵する高さをもつといわれるキナバル山の、あの頂上をつぶされたような黒々とした奇怪な山容からは、6「やま」を自己の空間領域の中でミニュアチャー[注5]として再現する発想は出てこないのである。

もちろん日本人にとって奥は山という自然からのみ出てきたとは限らない。古語では奥は沖から出てきた言葉でもあるという。国文学者折口信夫の説に神は海の方からやってくるという部分がある。神の座としての奥を考えれば、山にも海にも奥が存在する。しかしもしもこの神が一神教の神であったのなら、恐らく奥は日本人の生活の場において、これだけの普遍性は与えられなかったに違いない。我々は山以外に森であるとか、あるいは土地というものが日本の民族史の中で特殊な意味をもつことを発見することによって、さらにこの奥の普遍的存在をしることができるようだ。

（槇文彦「奥の思想」による）

注1　état d'âme　心の状態。
注2　雁行　斜めに並んで行くこと。
注3　上りかまち　玄関の入り口。
注4　ボルネオ　ボルネオ島は、インドネシア語名でカリマンタン島ともいう。
注5　ミニュアチャー　ミニチュアのこと。ミニュアチュアともいう。

問一 傍線部a～eの漢字と同じ漢字を含むものはどれか。次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 19 ～ 23 。

a

19 ケイ起

1. ケイ雪の功を積む
2. 巻末に図表を別ケイする
3. 養ケイ農家を訪れる
4. 駅伝の第三中ケイ地点
5. 電車のケイ笛が鳴った

b

20 フク属

1. 英語学習のフク次的効果
2. 神前に平フクする
3. フク水盆に返らず
4. 紙フクの関係で割愛する
5. 不フクの申し立てをする

c

21 若カン

1. カン過できない事故
2. 今日のカン潮の時刻を調べる
3. 使命のカン遂につとめる
4. 体カンを鍛える運動器具
5. カン大な処置

d

22 仏ダン

1. 大ダン円を迎える
2. 市長が英ダンをくだす
3. 先生が教ダンに立つ
4. 政府の失政を糾ダンする
5. 引っ越しの費用を算ダンする

e

23 色サイ

1. 迷サイ柄のバッグ
2. 多額の負サイを抱える
3. サイ三の注意を無視する
4. 委サイ構わず実行する
5. 人気イベントが開サイされる

問二　傍線部**1**「道程」は、ここではどのような意味で用いられているか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

1　舞台
2　時間
3　場所
4　速度
5　経路

問三　傍線部**2**「複雑な空間の分節」とあるが、これによって人はどのように感じるか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

1　入り組んだ迷路的な空間の中を進むにつれて、一度も経験したことがないのに、すでにどこかで経験したことがあるように感じる。
2　前後の接続関係をたよりに目印になるものに眼を留めながら進むにつれて、自然とその道順が正しく、最適であると感じる。
3　外観は狭そうだが内部が広い旅館にとっては、屈折する廊下がつくり出す複雑な空間の演出が重要であると感じる。
4　迷路的な空間の演出により、じっさいの距離を錯覚し、深遠で測りがたい心の奥、つまり想像的な世界にさまよい出たと感じる。
5　度々の屈折によって代わるがわる現れる光景や昇り下りで狂った歩行のリズムに翻弄されることで、迷路が好きであると改めて感じる。

問四　傍線部**3**「奥は極めてユニークな存在として顕在化する」とあるが、「奥」とはどのようなものか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

1　住居の中心でも裏でもない特異な方向に位置づけられるもの。
2　表向（ハレ）の領域と奥向（ケ）の領域の中心に位置するもの。
3　前後左右に展開する部屋に廻廊をめぐらせた造りの中にあるもの。
4　無限に広がるミセ空間である裏という領域の中にあるもの。
5　武家造りの家に住む人々にとって特別で重宝されるもの。

問五 空欄Ⅰ～Ⅲに入るものはどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同じ番号を二度以上使用してはならない。解答番号はⅠ＝[27]、Ⅱ＝[28]、Ⅲ＝[29]。

1 さらに
2 従って
3 及び
4 むしろ
5 しかし

問六 傍線部**4**「これ等三種の公的空間は必ずしもヒエラルキーをはっきりと前面に打出していない」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は[30]。

1 文化住宅の奥と武家屋敷の奥と町家の奥とには、必ずしも整った体系があるとは主張されていないということ。
2 応接間と居間と奥座敷とには、明確な階層関係が見出されていると一概には言えないということ。
3 ミセ空間とオモテとウラという三つの領域に、包摂関係があると提唱されているとは言えないということ。
4 書院造りと武家造りと町家のつくりとには、的確な定義が存在しないと言われているということ。
5 奥に当たる夫人の居間である御上と局と台所とには、相関関係はないと考えられているということ。

問七 空欄**ア**に入るものはどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は[31]。

1 親しく
2 青く
3 高く
4 疎ましく
5 貧しく

問八 傍線部5「奥は宗教性を方向というかたちで空間的に与えられた」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 32 。

1 宗教的な場としての山が空間的に街道筋から直角の方向にあるものとして認識されることで、「奥」という概念に宗教性が付与されたということ。
2 田園と家屋群によって構成される集落の伸びる方向に神社や奥宮を配列することで、山は宗教的意義を失ったということ。
3 神が宿る方向にある山が信仰礼拝の対象となることで、奥は参詣場所としての山裾の神社から切り離されたということ。
4 村落コミュニティのある方向とは異なる不可視な場所を設けることで、山が排他的な空間と認識されるようになったということ。
5 信仰の中心の象徴に方向性を与えることで、山中にある宗教的建造物が人々に認められるようになったということ。

問九 傍線部6「『やま』を自己の空間領域の中でミニュアチャーとして再現する発想」とあるが、この発想が出てきたのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

1 弥生時代以降に山ぞいに住むようになると、奥山を含むあらゆる自然を鑑賞する余裕が人々に生まれたから。
2 里と山の環境分離が始まったことで山は他界と見なされ、人々にとっては直視してはならない存在になったから。
3 日本の山は特に遠望においておだやかな雰囲気をたたえており、信仰礼拝の対象としてだけでなく鑑賞の対象にもなったから。
4 村落コミュニティの原型が完成するに従い、その形を自分の空間領域の中で再現したいという欲求が生まれたから。
5 山は雄大な自然を想起させ、万葉集挽歌に歌い込まれるほど人々の生活に近く寄り添う形で存在していたから。

問十 本文の内容と**合致しないもの**はどれか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

1 空間においては「奥」に「奥行」という概念が包含されている。
2 宇佐美英治氏は、旅館の屈折する廊下がつくり出す空間に「奥性」を見出している。
3 外国式ホテルにも空間の方向性という感覚はあるが、日本の旅館のそれとは別である。
4 戦前の文化住宅の「奥座敷」は、私的な空間でもあり、公的な空間でもあった。
5 図式的に示唆されるような日本の村落コミュニティは、現代には受け継がれていない。

問十一　本文の内容と**合致するもの**はどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

1　奥は、具体的な意味も抽象的な意味も持つが、抽象的意味の言葉の方が具体的意味の言葉よりも多く存在している。

2　日本人は本来的に迷路を好むため、観光地や温泉場などの旅館やホテルで次々部屋を増築することで、心の奥を満足させようとしている。

3　日本の住居には、独自の方向性と座の重畳性によって、狭い空間を広い空間であると錯覚させようとする工夫が施されている。

4　現代の庶民の小住居にも見られる「奥の思想」は、単なる空間概念にとどまらず、集団の深層心理を通してより抽象的な社会組織の中にまで浸透している。

5　神の座としての奥は海にも存在するが、奥の普遍的な意味を考える場合には、山や森という観点から考えた方がわかりやすい。

【選択問題】古文

※国文学科に出願している場合（国文学科を併願している場合も含む）は、(二)ではなく、必ずこの問題を解答すること

※この問題を解答する受験生は、マークシートの「(三)古文」にマークの上、解答すること

(三) 次の文章を読んで、後の問い（問一～九）に答えよ。

ある者、子を法師になして、「学問して因果の理をも知り、説経などして世渡るたつきともせよ」と言ひければ、教へのままに、説経師にならんために、まづ馬に乗り習ひけり。輿・車は持たぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃尻にて落ちなんは、心憂かるべしと思ひけり。次に、仏事の後、酒など勧むることあらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことを習ひけり。二つのわざ、やうやう境に入りければ、いよいよよくしたく覚えて嗜みけるほどに、説経習ふべきひまなくて、年寄りにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人、なべてこのことあり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大きなる道をも成じ、能をもつき、学問をもせんと、行末久しくあらますことども心には懸けながら、世をのどかに思ひてうちおこたりつつ、まづさしあたりたる目の前のことにのみまぎれて、月日を送れば、ことごとなすことなくして、身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取り返さるる齢ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へゆく。

されば一生のうち、むねとあらまほしからんことの中に、いづれかまさるとよく思ひくらべて、第一のことを案じ定めて、その外は思ひ捨てて、一事を励むべし。一日の中、一時の中にも、あまたのことの来らんなかに、少しも益のまさらんことを営みて、その外をばうち捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと心に執り持ちては、一事もなるべからず。

たとへば、［　　X　　］。［　　Y　　］。

一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず、人の嘲りをも恥づべからず。万事に代へずしては、一の大事なるべからず。人のあまたありける中にて、ある者、「ますほの薄、まそほの薄など言ふことあり。渡辺の聖、このことを伝へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師、その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、「簑・笠やある。貸し給へ。かの薄のこと習ひに、渡辺の聖のがり尋ねまからん」と言ひけるを、「余りに物さわがし。雨やみてこそ」と人の言ひければ、「無下のことをも仰せらるるものかな。人の命は雨の晴れ間をも待つものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや」とて、走り出でて行きつつ、習ひ侍りにけりと申し伝へたるこそ、ゆゆしくありがたう覚ゆれ。

「敏き時は則ち功あり」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

（『徒然草』による）

（注）○因果の理――因果応報の道理。仏教の根本原理。
○説経――法会で経文の意や教理を説き聞かせること。
○導師――法会の中心となる僧。
○桃尻――落ち着きの悪い尻。乗馬の技術が未熟なさま。

○檀那――仏事の施主。
○早歌――当時、流行していた歌謡。宴曲。
○境――名人の境地。
○よくしたく覚えて嗜みけるほどに――うまくなりたいと思って努力しているうちに。
○行末久しくあらますことども――遠い将来までこうあって欲しいと希望する事柄。
○ことごとなすことなくして――どれもこれも成就できないで。
○ますほの薄、まそほの薄――両者とも「穂に赤みを帯びた薄」を指す歌ことばであると考えられるが、歌の題材に関心をよせる当時の歌人たちは別のものと捉え、その違いを知りたいと思っていた。
○渡辺の聖――摂津国西成郡の渡辺に隠棲していた上人。
○登蓮法師――平安時代末期の歌人。
○渡辺の聖のがり――渡辺の聖のもとへ。「～のがり」は「～の所へ」「～のもとへ」の意。

問一　傍線部a～eの意味として最も適当なものを、次の各群の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選べ。
解答番号はa＝19、b＝20、c＝21、d＝22、e＝23。

a　すさまじく　19

1　激しく
2　悲惨に
3　不審に
4　興ざめに
5　恐ろしく

b　あらまほしからんこと　20

1　居てほしいこと
2　予期せぬ出来事
3　努力するべきこと
4　望ましいと思うこと
5　実現してほしくないこと

c　物さわがし　21

1　物騒だ
2　にぎやかだ
3　思慮に欠ける
4　がさつである
5　あわただしい

d　ゆゆしく　22

1　甚だしく
2　気味悪く
3　慕わしく
4　忌まわしく
5　なつかしく

e　いぶかしく思ひける　23

1　不吉に思った
2　風流に思った
3　奇怪だと思った
4　知りたいと思った
5　もどかしく思った

問二 傍線部①～⑤の助動詞「ん」について、意志をあらわすものはどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

1 ①おこせたらん
2 ②勧むることあらん
3 ③まさらん
4 ④尋ねまからん
5 ⑤尋ね聞きてんや

問三 波線部「雨やみてこそ」の後に省略されているものとして、最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

1 行かめ
2 行かじ
3 行きたし
4 行きける
5 行くべし

問四 傍線部**ア**「説経習ふべきひまなくて」について、法師が説経を習う暇がなかった理由として**ふさわしくないもの**はどれか。次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

1 説経師をめざすのが遅かった
2 技芸の習得に時間を費やしてしまった
3 まずやるべきことを後回しにしてしまった
4 乗馬の技術の習得に時間をかけてしまった
5 大切なことと些末なことを取り違えてしまった

問五 傍線部**イ**「なべてこのことあり」について、「このこと」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

1 目の前のことに心を奪われ、本来の目的であったことをなし得ないまま、年を取ってしまうこと
2 世間体にとらわれ、他人の言うままに関心のないことばかりに取り組んで、年を取ってしまうこと
3 興味の赴くままに様々なことに手を出して、結局、何も大成しないうちに、年を取ってしまうこと
4 志は高く持っているものの、ついのんびり過ごしてしまい、何もしないまま、年を取ってしまうこと
5 新しいことに挑戦する楽しさに、一つのことに集中して努力することを忘れ、年を取ってしまうこと

問六　空欄X・Yには、二重傍線部「何方をも捨てじと心に執り持ちては、一事もなるべからず」の内容を説明するための具体例がそれぞれ入る。その**【具体例】**の組み合わせとして、最も適当なものを、次の1～6のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

1　A・B
2　A・C
3　A・D
4　B・C
5　B・D
6　C・D

【具体例】　次のA～Dは、『徒然草』で、何かを成就しようとする時に気をつけるべき事柄について説明している文章の口語訳である。なお、意訳・省略している箇所もある。

A　碁を打つ人が、一手も無駄にせず、相手に先だって、利の小さい石を捨てて、利の大きな石を取ろうとするようなものである。その場合、三つの石を捨てて十の石を取ることはやさしい。しかし、十の石を捨ててでも十一の石を取ろうと判断することはむずかしい。これも捨てずあれも取ろうと思う気持ちが、あれも取れずこれも失ってしまうことにつながるのである。

B　京に住んでいる人が、東山に用があって出向き、到着してから、西山に行けばより利益が大きいことに気づいたとしたら、すぐに引き返して西山へ行くべきである。「せっかくここまで来たのだから取りあえずこの用件を済ませてしまおう」と考えるから、一時の怠りが、そのまま一生の怠りとなるのである。

C　技能や芸能を身につけようとする人は、「上手にできないうちはうかつに人に知られないようにしよう。ひそかに学んで十分熟達してから人前に出るようにすれば、たいへん奥ゆかしく見えるだろう」などとよく言うようであるが、こんなふうに言う人が一芸も習得したためしはない。

D　世間に逆らわずに生きようとする人は、まず好機というものを知らなければならない。時機を見誤った事柄は、人からは聞き入れられず、反感を持たれて、成就しない。そういった好機というものを理解しなければならない。

問七　傍線部ⅰ・ⅱの説明として最も適当なものを、次の各群の**1**～**5**のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号はⅰ＝ 29 、ⅱ＝ 30 。

ⅰ　万事に代へずしては、一の大事なるべからず 29

1　「あらゆることを変えないままで放置するなら、一つの大事も成就できないままである」の意で、大切なことを成し遂げるには、他のすべてを変えても構わないという覚悟が必要だと説いている。

2　「あらゆることを代理の者に任せて放棄するくらいでなくては、自分しかできない大事を成し遂げることはできない」の意で、自分がなすべきことが何なのか見極めることの大切さを説いている。

3　「あらゆることと引き換えにしなくては、一つの大事が成就するはずはない」の意で、一つのことを必ず成し遂げようと望むなら、他のことが破綻しても構わないという心構えを持つべきことを説いている。

4　「あらゆることに努力の代償を求めないようでいては、一つの大事に対する代償さえも得られない」の意で、事にあたる上で常にやり遂げる気持ちを持たないと、たった一つの事さえやり遂げることはできないと説いている。

5　「あらゆることに変わらぬ態度で臨まなければ、その集大成である大事を達成することは不可能だ」の意で、人生とは一つ一つの小さなことの積み重ねなのだから、それをおろそかにしては大事を達成することはできないと説いている。

ⅱ　人の命は雨の晴れ間をも待つものかは 30

1　「人間の命は長雨の終わりを待つようなものだ」の意で、長い間、謎の解明を切望し続けていたら思いがけなく答えを得られることになった登蓮法師の驚きをあらわしている。

2　「人間の命は雨の晴れ間を待ち続けるようなものである」の意で、歌の題材を求めて厳しい修練の果てに教えを得られることになったという、登蓮法師の喜びをあらわしている。

3　「人間の命は雨が上がるのを待つようなものである」の意で、人間の命のはかなさを梅雨の短い晴れ間に例え、一刻も早く渡辺の聖から教えを受けたいという登蓮法師の性急な性格をあらわしている。

4　「人間の命は雨が上がるのを待つのとは異なる」の意で、降り続く雨も待っているうちにいつか上がるが、人生には待っているだけではなし得ない事もあるのだという、登蓮法師の覚悟をあらわしている。

5　「人間の命は雨が上がるまで待ってくれるとは限らない」の意で、人はいつ死ぬか分からないのだから、天候にかかわらず急いで行って教えを受けなければならないという、登蓮法師の一途な思いをあらわしている。

問八　本文の内容と**合致しないもの**はどれか。最も適当なものを、次の**1**～**5**のうちから一つ選べ。　解答番号は 31 。

1　ある法師が父のすすめに従って説経師をめざした。
2　優れた説経師となった法師は、乗馬の技術や宴席での芸能をも身につけた。
3　人は坂を転がる車輪のように年を取り、加速度的に衰えていくものである。
4　一日の内でも、少しでも自分自身の益となる事を優先して励むべきである。
5　渡辺の聖は登蓮法師に歌の題材に関する知識を伝授したと伝えられている。

問九　次の文章の空欄Ⅰ～Ⅳに入るものはどれか。最も適当なものを、後の**1**～**6**のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同じ番号を二度以上使用してはならない。解答番号はⅠ＝ 32 、Ⅱ＝ 33 、Ⅲ＝ 34 、Ⅳ＝ 35 。

（Ⅰ）に成立した『徒然草』の作者（Ⅱ）は、日常生活で見聞したことや考えたことなどを巧みな表現で綴（つづ）っている。感覚的に自然観や美意識を記す章段がある一方で、実用的な知識に裏打ちされた備忘録のような章段もあり、また無常の道理を述べる章段では論理的な色合いを帯びるなど、その内容は多様である。（Ⅲ）に成立した『枕草子』、（Ⅳ）に成立した『方丈記』と共に「三大随筆」として評価される所以である。

1　鴨長明
2　兼好法師
3　平安時代
4　鎌倉時代前期
5　鎌倉時代後期
6　室町時代